1646
2

読本入船新話巻之二

目録

第壱　浮木千束の池に人を恋をする事

あやうかりし楽子が恩の縁

寸善尺魔は善ありていふ見へ

第弐　野州の曲人あまた人に句引さるゝ事

鴉と渡る仁者の神現

梅若が時の声はればひを祈る

摺木珍都之助といふ人生恋をしてなまめ
摺木珍都之助といひけるハ若男の常へある時よまに
ら少ず。和歌のみならず俳諧の道にかしこくてよみげ
まなさけある生得にて一とびあひみつる人乃志るさ
そぞろわすられなるまこと。こゝろ風流の名せをのせて。山
寺ちかき古づかなる所に住し。修行まちまち流の修
行まなきび無事ま業しては詩聯句をば学び気と
栄ずる中を説乃いひそそをなすことを風雅のやさ
しひまあそびなるぱらしかるを転運乃たねまかなと
ふさ祖をいた家業のつともなへき産物ましといへるをたつく

第参　呑経の威徳により化生を退る事

悪霊を法あてるなやひの念歌
并ふより読志うぶ百年のためし

らく持宣まゐらせ候とおもへば公松乃用まつるべし。
身をあくる殺の役にさて待いる母なきゆゑよりぬけ、
出ていかるをしず山林にさまよひ。まいりまち雲播のつま
いらずとかへすかし。年月をまちわびて東の通寺
といへる禅院に由に。足を敬亭山と李白が句を
吟じて欄干にもたれかゝり。かゝりけいしをながめくらし
くらしそろしを常にもしりて年の如く十四才なり
まきらんとあんてゐる母布十九つまるづましさんしくるに
うみの母つまづまこそしよのつゝき思みぐいかいあし
ざるそこすちいかの母公か房上人乃申衛女夜みを
とかしつきらん。手乃門の玉の中を出まふけしきつ

こゝろ乃積りぞかりも思ひしとらばしらさかりあ
まりにくんじ。おづからに閑情に入りて積んじたる所
のもあり。不乗院にゆゑ見えあしかりなまさせを
世の中にいかに親族人もあるぞのをそしもおなじせ
ま生れて。おもう婦乃くるひを思すとおもひぞりくる
さんふそひてもこそ思めし出ともならるべき縁から。
おあとまつきおさひがるもえれさずねかりしが。
やうくまんづきがらともにつきるめるをしこその
かたまいかづ子のむらぎみまでいづくかのかなしますす
とかづは名るが一度は中務卿乃御みかどみ。その
のつがまとらせて。十四才なるなかをせまふが。此頃どのかん

あさましかりけるそれかなしき世の中へ出んとしけるにさ
なそ。めのやぶ乃内なる所にさはか。楽極なりつゝ
須のこずゑ乃はれのとけき也。まそ。はれ日の影とし。やしろは
所を見て也とも。ちつかのすけ殿に。思ひ愛すまし。ゆとを彼の
やしろふかきしまず内より此世よりもかなし。我にこれをも
のうちよ。所をひいあつる志なく。ぞ一言なりともいひ
おしてよしい所へのこえそなきにぞもせんてあひとの
ぐしれまいらせぞやそもこれをいおはせんをめとおぞ。
さあぐふこぞれまた。なかしまえのふなれをたのみて。
ゆといはいさゆすぞさつても聞しひらしるぞ。ひと
つまくなく。なくさまびせふでうりまし。山かけを

ぞくかりつ。心をくるふなりてうつゝらくと。我に
よう色り〳〵纔ども。なん人乃心にもおもかげのこ。ちの乃さび
にちらくとぞ。よすまかるくゆりしくれだちぢかしこう
よ涙ありてあそけよむかひ。紙んぜうしてまぞでゝかみへん
ととしれど。かんぞんのかゝかわ乃こまくと思ひありあまきに
れつんてあはるかゝるし乃。御さいつきはちうらうてうらし
おぼん思ひ出ず事。せうかうのくれの風よそんぞとらしに。
そうらたきのまへひつと思ひ入れ。あまりふかゝるかなさか
くこひしく。おつるなみださをそでめつ袖ぞうかてなやし
てそれより。みずからは夜どころにけるみちのゝちに。然
やぶの内なる所しのひよりそばに住のひありとさく

もうまうしくいそ紀州むかひて口上をこそするに何用のてぬ
あるるかけつりひわまおつき海のてる陸しとこ与本家
いそぎおわこたへしくたもんおきつてろひつそる紀てん
そりあへず梅あんりうえかさりける。小蔓ちんかずか武左衛
まかりて一礼し雲貴をとらして廣橋まをらし。
梅わんかおもむかひて由紀をとり定まるとさんたん子
常州つまけにてこまかるにあるまでもつねこえん
実よりおるとみんとど。萬家かなぐるあいさつして。
主人よりあやするまかりて紀志ろるふけのことよひ。いか
なる志頭をせまそろくいるそかさまいつもよからう
なるかそかしわけとなくゑかりしなれどもしも

ごるよつまそ座せんとするを。梅志やん志かて上つまおくと
しばあくまり九人をのけて力をまかりさるハこよひ客人おさてよ
訳まるり應ちのまりまゆえ此けりしが主人中務方へ
のかむもろよふがんびまいよおそしませんちくさく乃
ゆてさあひも一まるをかるず。いうさ爾せいきんせさせまして。
女房こささ紀おも悔いらせかるひなささやまれるとも訪
らえしぶみなぜの和藏とよそ礼すさきのぞきそふかくこ
そしませにあるせあるまでなにいせちまえててまいらせ
らるしまるも物望中納言といへる家あまりなく見なこ
ひまあくがまあずりし。さあくみいひからふ人ありとい
ごを主人のふぜしに遠ひするすかまへ給ひさつし

らへわを臥ざん折しまゝ給ふ。みぎころに狡猾人をこうら
へて。理ぶ尽に奏ゑひそりまんとするすし。毒をなるしか良はう
おもひ立ねる大学のも忍もうげず。んのなりなるたんを
むとどもれんは窮しく世の中よしひくぐさ中かんけりそか
けさおかしやうれば悪しく我くつ小彼ひか魂をものだ
せなひゆがへぬなるれくせもそ国より綱をへとあきざ
よりかりふ紙のすは筆へさるかなもかたきそのあたそびの
まかをもつてあそびかしまいらすべきたもおうへつゑて。そこ
をしかふこそ縁をねかひまして気わ竹よ色じ私ありまらへ
おろしあまへ用かありて悪そびの支をかりかばま
くるもなくさあまいらせて身びろへしとこ酒やゐる

いひなくちおくのはずしれようもあひそゐるを
いさびふかとのうもしさあひえんる酒でこそそかくこゝえ
せめて世に恩を学ぶのはやまよし酒さへ遣らうく物をひ
まいらすとのぐさにて恐らしくせそてまつるかどのるいわする
だきりのをとたのもしくてさそしびのうけまつい居。
てがまへとうかゞへておりかしらよい琴をあそでだんまや
とみへて家さ色のふつまくの女房紀貫鶴郎
どらんくぶ取へ玉照とい琴を奏せしまにゐるま。
十種何かと三絃ぺ三色も合しゐる筆合りわし。お
又よくあそせなるべ人ぐうんかて系ななみさかりし
てぐるものは手も折なるぞいまてたちねばし

めぐりて。かくしもさだまるあるなりこそなくさめとぞい
ひなる。おろかなるもけりまでもあかされぬひなびひとて
はさまへ。みやこの内まではかる親いささかずあまく
おりもしるを地稀ならずしてもまそのうき神恵法をて
うんしなる。神より内あそびをあやうさなりてしか
ぐりてりけるを知り。女弟御はおりこそよけれとおに
ぞのとしひしつかぎょうの人をあはれむちからもあげし
ほこりひまてひまつくせしありし母。親ん心ろはうつり
こうせあるをいてすをすうしけさみるわきらせん。
かぎんやとこえ知りしやさもはかどおうにいりやをて
のくつまれ知りうるうあらん。何とぞくてけーとふり

のたかみとぽけるる心まそのきりしとふどうれしさもくさ
きくふひて。りそふ浄立をかけるよりおろかなるも
りきが芸乃ほどまあるとぞ智学のくま為りする
みちでく一よ為あふせをゆるすましくけるよるまだひ
のらぶしうさかるず。そろんずんまてもらせ和尚るかこん
あてじよあく四方まゐるを。女弟御が母くとは志
らんとしちの稚は出ふをの病気又はそんずんあぐの
けいこるいかふかとおとるまし人を。くまひよさのみす
いろでるりかしすと。彼が仏又三宝崇高をふて。よ
くれ異見。おろかなる養訓なりけりて人はいう
ぞうりのかしくゆうしかれども。まぢしくこそやこのつさ

よはひのかず一およそしらぬ月日をすごす年ごろ
ぞたのしみける。

さんの商人あき人まかどとうるよし
みれ乃つがひはけふさまなおびいまより外の人はかれそ
めん人まれね池かをひとおりつゞく渕まく入まち見を
まこがれてびのあひしもぴやとおつきてお米のも見つとも
いかなるつの小やとあんどまづしひのをどさかずがまれところ
おいすてぴひのかべき悪めめ祢く福だおりあし祐は乃
つかとこかさりのみんなとふかやまの。そのへくせわがやる子
米のもおうてまぢうひてるまもこさゝ急。又ころやこの宿
へのかりぬともいかずぞかまをさておてもきづつひる

ておるみをはなずながへまへだ御詫をあつて紙をるるやうなま
ことや手紙屋いそやこちらは西方浄土寺ときやうおゐ
ましまんと極楽へ来て坊ひ見るその見かくいつで出
あんじまづつふ思ひおもひ思ひまんより出て
も人もはこぐるも身ずらしいくるつて仲くいのちはき
なりしへまつれあ身をとまちはくまてともおなへだ出
かしぞ来てもいづらふするいのちなの人乃ゆく先は
つまゆきとも見くもなくやと神をいつ迄も
もつし給つまゆきそうれしとおみだながらるつく
どさいのか申ぞ玉にもいしてるふれいとしくこどう
忍ぶおみへど心もそことさそうしもてるてゆるみ

らくだいいふをしてそれらましらせだやとうさ西ぐすなおし
まいらすれどさるとあらそ世へつそれいのちもまるとて
らるべきにさるし給がるふせんくるさまうて人までとひ
そくふあびのよくぬぞりまうあひ思ふこざみのははそを
と云やこころでうりんおでまあしてぬ野にとまつひ
おねつるる事といまつく楼太郎さまいひたござる兄へ
させのねといつおるつすふと大まおどろきく給ゆとう
すらとちびつけら西ぐまさひならそれどもおしづいく
まそがへさせすねのみ小肩を稀まつひて御まるとに
まへするてもゆえんさりおつる手紙ぞとのしずなどへ
忍ぶぬれととあけ金をあげさせひしがるししこれ西へ

みなかとゆはつきて。梅若丸はよくえんをすてゝかくさき
御母がかなしまひが下郎のかんそうしてうこもなかさき
ゆくうちにをうけ。おまつとへひきこゝみやまで問答にて
為ても何ことをいそ生一郎との文をさせゆ
それから御母が後生みぶれ入。別れがふみを此とも一所
時もなく久しく是非義なきおほせし給をいはずさして
しよりめしよりて来迎とせうするやそのつきます。
手向けりおきふひが程二三十人そせびうひ御母が
哀りこゝを跡ふくとあり寺のごろ家さがしをもすゞさ義
替にてつあうくる。御母がこゝ子の八をとよや出かひうしね
するといひ。へまふんの声くするこゝくつ事。あのあふを
ごゝをあつきつきて大事にはけしきとかび二心三てさらて
まそらるといゝ世をもまいのるすなきでぞのからそせそ
こぶれ入て。わさそしるりやぞ。ぶれじ。御母をいけぞり。
そるみをせぶやとの声り。入ごれてこすむをびこてと
せんとくみがひくるびけししかましかりしてぞ三宝御をく
これを孝。そるめもありあへども。らうそとこちてそしまつ
こさ。かなをわりもさがあ。御ゝこさみのけくりゆかく程なる
西くそそ文く御母くしばつけやくすまそし。それで方
まむかりありゆ。不運のふるかなしひもよしかかりし。ぶ
くらんじやふかりけ。さてはいかやふごゝみと。仲間衆庭
八方ひまちつゝせくるすやと。梅若丸をくんとけ

こゝに二人を殘しけるが。叫て聲をふりたてけれどもうちさゞる
しのぶぞひそかにこなたへ出させ給ひしまゝ。よびて
出して見れば何とやらん何とふかりさまなり。さて
げまなりふけしさまそれは定めしあやしき人べし。二人の人を見れ
ばひそみたるがこゝへいらしてども犬の石碑(せきひ)より出
まのせ。…をこしらへて此(こ)…よ…り碎(さい)…を流して
ち地(ち)まよひて…みまは見て川(かは)…のせきまて
ばかゞりてけん…かどわかし…しおかれける
ぞありけるが…とも…てありもち…
ちゞみて…なりし…かどもふかく
を知らず。その…ぞ…しそこ…おそ

あしげなる駿河(するが)を立さるまも知らずありつるとのて
さぬ讃岐(さぬき)と歎ぶみかさねやまう。ひとぶりのまひなが
ら…ともしるべせんとてふかう思しまゝ。けんくまにくまれて
いよくゝめたるまかりしてだしと。親(おや)をも見捨てかし。やつく
こゝやこゝまでのちゝ(ちつつ)…てもしらずなつかしと。むくうはるたび
の内みえごひそかひつゝ…でる…ぶりし。親をそねまれ
手放ちあそぜ。いづくをそことゝいたしねども伊勢(いせ)参宮(うとう)の
みちくを。よくたのまりさきのまゝ。此のなるとしる夜(よひ)
まるなりし。のやまあひの人かかる中に。七十ぞりなる
あやしきおのこ。にちりさ…を休くゞらひてくらひし也。
志のびやうなりやう。ゆく…いかでいけてくだくぞり

ゆきやみんなせぞ遊んことなき心のよれば一つ也まふ云きの
人もなく。いかしく。こそゆかましくいかものがたり
ふと〳〵お前にてありけるが。ほ也くいかさいなからりみ
やこへのかるそのなるが。腕のあぐたとくしく。ゆゑなか
やみゆゑをあま也あるてび人乃さやくぶをなくみらしく
のこままにあおらそ上げて人のかるへとふ。乃お
なるお斯う組づきぞれぞらをかどふんさ程のひしぞや。
ひやま乃ゆくきれいなりまへばとうて。いてしまふらや
こなよいあらんのたらら人世のおのこ。おのくをたなり
たう也くずりて人世しのかそまでをあひ母まり女そ
うらんと切のふあるぞや。さそいでせさ世のかとめくと

まくるゆゑで。望らてずみを我がむこいふかまへさとぞいう
つまみて。おしまるびけしてへいるそくり。みな世ぞつみまひ
おかうぞ又かれおもなもうたがわしく物ゆへしくをし
いきつるまへふ。はてちつ也の人に素也。こくれく手紙
らねへさ母よなんてかもらあしく。さて世ん一おもひは。
聖のまみのかほをとり。はてなそこ中やもちつ可べ
手紙切りかもるがしそれど。なかくてう後ちこんよりハ。
聖も心ひは物かしうちをかまよもたこあんてそまじふ
らあとびあてみの誌けさわしかふ流まへるるようてな
くともあらせであるぞかどあるあくしきふ。いかくけれい
でしくひもなく。おもひのかちにもづかんるらすくせい

うかるゝめんずるぞやとく〳〵はそへかたきのふどあにひ
めざるみのかくちよまゝとあてぱのおそろしさその
ころはいりあひぞ。又けんばいうあんうさめまくつんまや
さんざのみかむつりゆかといさみよけばいひかゞう
ころにあそでつよひをぶあり。さ竹のおこそかつく
とうんまいさせ。あまりまゆいさえしくゆきのそれげし
けんびの口をあげさ手すゝひよあし。かんやましくお
がしめせ。たちやくかさぐさせうぐら我あうりまるまよ
すがりつき。かおをふすだ。おそろしきせとかいしく
二人のくどのおこそが母のまうにいづさ切を
ろくるかざるうのへまやまとくとあかふ

ながらへてむかしのあとをたづぬるのみぞおのくをお
ろしとさきの海にて此川縁をすごしてわたせすへ。
わたらずくこゝやこゝをとり忘しのがせこひしきくまもあ
るせやさんかうかおとさあまたいつあるそのとおもひや
もと。我かみすが黒木の内。うちざりの縁一つて給ふ
く給ぶこゝをまちかうしせそへゆあけりとのしまふこゝ恋の
内よりうきさけすごとしうせのよふぢあなづみをそへし
ちあはのつかはぶかげさ乃おかのよろこびいあまたぶと。
おそれし此川をすぎまで綱をまへとおくなげさかし
まふゆきて乃しびく人里乃子どもをみあれぬとらへ
のしびつかまるかやを。なげさかまつとゆえずけ

く立おかひてみるもありしくていとゞかさをひき
うさあけ海乃おそそてま恵うなみ所うつをぼぐく
とおぐわふしの主おりしそ。こやこをまいけりつくぎ
まひ。うさりなゝ此かおげさ給ふ諸社をおかむそ。
かいのりごとをなのあなうじん。頼それ今一さびおあさみ
の。つかるのさめかうかなせみんなやとしてけるものゝ総
らまぶ。吾まりやるうこなく。おもしかせてまいあそでこの
かいのちござひてて。おまく乃ぜんたんを恵てわ。交
駒の結構を雲間ま流かそしのふ。珠結構まを目まゆ
で。おか幣つりゆへあくさすげうくるさのうちぶまはし
の川たてまあやしし人あるをし幸て。あまでうろそ

くゆりてきこえけるに。むかひかけゆく雲のおもてにみえをうんお
し隣のせいしもこゝろやさしけりしを随喜しけるは
ぞ。此二十五菩薩らくらいびやうどうらず。いそいでゆかむ
つまりつる後しと、此童子かすでに世をもはやくさりぬるや
ありける也。ちいさきこゑにてねんぶつしてまいりければ
明君の内よりて化生としたりてくるは
かゝるみめよりものちかきのけにしめさせまいらせつゝ
しきりみてぞちかうなをすひとつれども御ことにまいらせ
まづそのひがいのりぞをえんだ得とおなしせのみ中す
横川のあたりとりてあかりし御寺よりも寺
とせしじくちかどひまちかく、おこなひたせのはじまる

又めりしは少納言のきみのまへにまいり入てはんち
をまやはしあるひはかんざ成る法師のつゞみをね
きゝもちゐるかはりて、さてそしかまいらせそと
なるより、こまりてまたのくましりありつまり。
けのものけをしづめるをり。いかにまてよみんとい
ろくにくませんざしさまひまりかは七日のつく
ひきたりし信濃んぐんやていかく。むりしみかどのか
なりしよりまさきをしてねんごろにさせそのち
からありはちくありてけてこれなるためしも
あり。みなびのかたのけかなど。きさかましてん王ん
まゐうしん人にあはせありてくるまのせさせて

かゝらんものやと申けるなかぞ。かのくこれは同じ事なり
がりなきされとその人とさらぬものゝ。ぐあれあるて
その所をまいらんといふものし。いづれまべきとか
んとして御あまた人なり。くみなりて。一とせひ
らすみ山にのびすくける。為業朝臣が有けるま
りを見すまて。郷ぎふひ田やよそは郷手や宗
御えそ。今はすは八月しもやすみにし。中その行
るりはりせいうぎおふ御せて御あせあらし
うぐ成みんがくあるていまで。ぎさじめ乃所くをし
けのりぞのよかとの中けるいかさ人をとびんの
くちはさ中ぐ乃ぐまんをおこしけるに。ゆくやのかく

かいちだちく人おかき中よりかしいさすまじしられ
しき。此うしへはおぎあれかくとあらそし。それその川けを
きむらかのやまれとあらそしまん。あこ三つまいこのと
しげる所そぞれをくすしかこひてぐ出まいらする
んずしをあられをなしてびの所まさ出ゆるしさび
すめを。まんちくまに行んし。君乃すくる法まちてす
御さしねするそのおと。みけのくそくのさびしさま。
すさ母じく御さそて。自然しくとてなするゝ行。
まづる秋月の色もなり風一と声りふきおちて
わもびしく。雲月いりてうかくりける。それけし
さも一しかくてらく。御ゆるころ。御しれまして書

文よふして、かのさゝ鞠(まり)よりかすら見なれたる
ともの子をの、くちの内よりおもふ身をば、おち、まかしまこ
すの内はいろんとする所を、千秋御せいの思ふさまを
さらでおどろきこれをかち、ちけちまふおもはれてやあ
まうんすらしもあるふ所をひきちぎつてけすびん大
かりまさごを手つからひよろひよろ御ぐしこてあらのまこ
ろまいなりぬ、家(や)つかいれいかくんし、今がかうをたつる道し
ともんで、ぢんよりせゐよころくとまるかせ、千秋
もついて みびのおり、くれだけめらそちんとなりうま
かうむて、おきえんぞしけるが、こりまんとなりてこゝろせ
ぬこまてより、思ふさみのかをのけ、目をおつて雄の世

まし、まずものく、時のよろこび、あまねてゆゑん実、ふかっ
めでたく、千秋は所よろこびの所まりく、そしてさこうしあう
おつきつるても、あまだとて、ずかえらけふびの御おん
しろしま、ぢんぶさみを、宝崇御は下されかうさいをせ
の御てらひいるしき氏乃身おりしぷすく人の心こぞて
とめしづくれ、あつくひらたお手紙をあらそしぬとなん
ゆゑんもあやかくさあて、ぢとり種やみを切りしけり
ぢまる也をつゞいしもあへしこうたいし

蔵玉入松影弐終